

# I. そのらしさが発揮される幼児教育の在り方と 幼児の見方や捉え方の共有に向けたエピソード集の作成

—「つながる ひろがる 札幌市の幼児教育」の実現に向けて—

## 1. 背景と目的

### (1) 札幌市の幼児教育の振興を図るしくみ

札幌市教育委員会は、平成17年に「札幌市幼児教育振興計画」を策定し、札幌の未来を担う子どもに適切な幼児教育を提供する観点から、札幌市の幼児教育の進むべき方向を示した。その際、市立幼稚園9園と認定こども園1園は、従来の園児の受け皿としての機能に加え、札幌市幼児教育センターを補完し、「研究」「研修」「教育相談・支援」「保護者等啓発支援」「幼保小連携<sup>1</sup>の推進」の5つの機能をもつ「研究実践園」として位置付けられた。

研究実践園は、市立幼稚園及び認定こども園の園長と幼児教育支援員<sup>2</sup>が中心となり、私立幼稚園、認定こども園、保育所等の幼児教育施設と連携した取組を進めるなど、札幌市全体の幼児教育の質の向上を図る重要な役割を担っている。

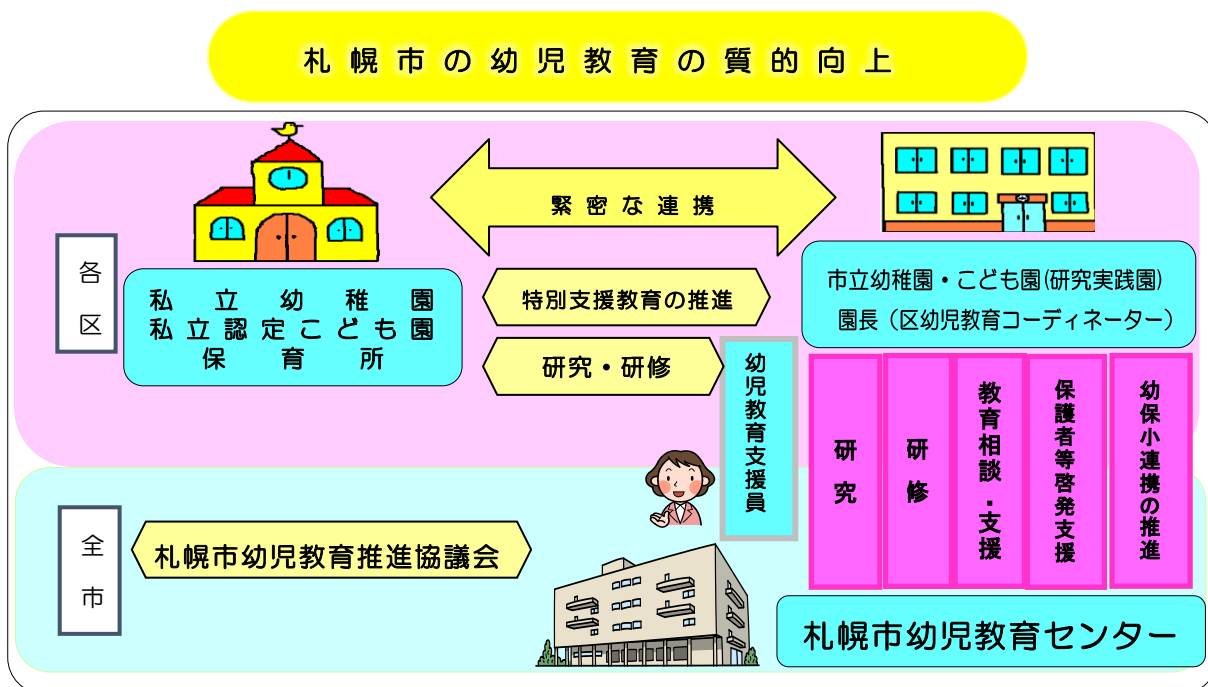


図 I - 1 札幌市の幼児教育振興を図る体制の概要図

### (2) 札幌市の現状と課題

札幌市の幼児教育の担い手は9割以上が私立の幼稚園、認定こども園、保育所であ

<sup>1</sup> 幼保小連携 幼稚園・保育所・認定こども園の幼児教育の段階と小学校の段階の接続・連携に関する取組

<sup>2</sup> 幼児教育支援員 市立幼稚園の教員のうち、研究実践園の5つの機能を主に担当する教員

ることに加え、私立幼稚園等の教職員の平均勤続期間は約7年という実態となっており、指導方法等についての蓄積や人材の育成が困難な状況がある。このことを踏まえ、幼児教育支援員が、園を訪問して特別な教育的支援を必要とする幼児への関わり方や指導について教職員に助言等を行う訪問支援を実施しているが、各園年5回程度の訪問にとどまっており、園からの要望に応えられていないのが現状である。

### （3）幼児教育の動向及び市立幼稚園の今後の在り方に関する方針の策定

幼児期は、その時期にふさわしい生活や自発的な活動としての遊びを通して、子どもたちが健やかに育ち、生涯にわたる人間形成の基礎を培う重要な時期である。近年、幼児教育がその後の学力や運動能力、成人後の生活に与える影響に関する研究結果が示されているほか、平成27年の子ども・子育て支援新制度の施行、平成30年の幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針の同時改訂により、3歳以上の教育の整合性が図られた。また、令和元年には、全ての子どもたちが質の高い教育を受けることができるよう、幼児教育の無償化が行われた。

こうした動向を受け、本市においても質の高い幼児教育を提供できるよう、今後の幼児教育及び市立幼稚園のビジョンや施策について定めた「市立幼稚園の今後の在り方に関する方針」（以下、「方針」という。）を令和2年5月に策定した。

方針では、札幌市における幼児教育の将来像を「つながる ひろがる 札幌市の幼児教育」とし、全ての幼児教育施設と小学校、家庭、地域がつながりを深め、連携を進めることにより、幼児教育の質を向上させる取組を全市的に展開していくことを示した。

また、「方針」の基本施策3では「特別支援教育の充実」を掲げ、「子どもの可能性を広げる『インクルーシブ教育』を各幼児教育施設において推進する必要がある」ことを位置付けている。

### （4）本研究の目的・取組内容

以上のような本市の現状と課題や方針の策定を踏まえ、幼児教育施設の教職員（以下、「保育者」という。）へのインクルーシブ教育システムの理解啓発を図ることを目的として、研究実践園の実践を基にした、「すぐに実践に生かせる特別な教育的支援を必要とする幼児への具体的な手だて、教材等をまとめたエピソード集」の作成と、各施設の保育者へ、より効果的に発信する方法について研究を進めることとし、本研究事業に参画した。

## 2. 方法

### （1）研究実践園における幼児の実態に即した具体的な手だて（エピソード）の集約

#### ①研究実践園の教員から私立幼児教育施設のニーズ等について意見を聴取

○日 時 令和2年7月9日

○参加者 研究実践園教員（市立幼稚園園長・教諭）87名

○内 容 「方針」の各施策について研究実践園教員意見交流会を実施

施策の具体化に向け「私立幼児教育施設の先生方が知りたい、特別支援教育、インクルーシブ教育の実践」について、意見交流会を実施した。実際に私立の幼児教育施設を訪問している幼児教育支援員や、各園で保育を担当している学級担任の教員から具体的な意見が出された。

#### <保育者が知りたいことはどのようなことか>

- ・支援の必要な幼児への関わり方やその子を含めた学級づくりについて
- ・その子の課題にどうアプローチするかについて
- ・その子のことをどう保護者に伝えて共有するかなど保護者との連携について

#### <保育者の悩みはどのようなことか>

- ・「悩んでも聞けない」、「どうしたらいいか分からない」、「誰に聞いていいか分からない」というのが悩みではないか。

#### <その他（研究実践園として発信したいことなど）>

- ・支援の必要な幼児を「学級に入れなければ」という視点ではなく「一人の幼児への関わりが学級全体の学びになった」と思ってもらえるようにしたい。
- ・「幼児がなぜその行動をするのか」、「行動には必ず意味がある」という幼児理解に基づいた関わりが大切であることを伝えたい。
- ・保育者の悩みに応えられるよう、相手のニーズに合った発信方法の工夫が必要



図 I - 2 研究実践園意見交流会の様子

## ②エピソード様式の作成

研究実践園としての共通した考えのもと、各園がエピソードを作成できるよう、エピソードを整理する上で大切にしたい観点を2点示した。

1点目は「特別な教育的支援を必要とする幼児の理解」として、生活している姿を大切にしたい幼児理解（よさの共有）、幼児の発達に関わる要因の把握（困り）、保護者や関係機関と連携した幼児理解を、2点目は「特別な教育的支援を必要とする幼児の指導」として、保育者と当該児との関係性を生かした指導、幼児の長所を生かした指導（もち味・特性）、保護者との連携による指導、関係機関との連携とした。

また、「子どもの姿」からエピソードを作成すると、保育者が活用しやすいのではないかという意見があり、5つのカテゴリー分けとその具体的な姿を例示することとし、表 I - 1 のようにまとめた。

表 I - 1 5つのカテゴリーの分類と具体的な子どもの姿

カテゴリー	子どもの姿
行動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個人の行動が多い</li> <li>・ スケジュールの変更が苦手</li> <li>・ 落ち着きがない</li> <li>・ 怒りっぽい</li> <li>・ 緊張や不安が強い</li> <li>・ 目で見たものに反応する</li> <li>・ 空気が読めない</li> <li>・ 自分の世界に入る</li> <li>・ 気持ちの切り替えが苦手 など</li> </ul>
集団	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一斉の指示が伝わりにくい</li> <li>・ 行事への不安が強い</li> <li>・ 勝敗にこだわる、負けると怒る</li> <li>・ 活動に参加したがるらない</li> <li>・ 学級での活動中に立ち歩く など</li> </ul>
遊び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遊びを転々とする</li> <li>・ 自分の好きな遊びをすることが多く遊びの幅が狭い など</li> </ul>
生活習慣	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 身支度などのマイペースさがある</li> <li>・ 偏食がある</li> <li>・ 排泄の課題がある など</li> </ul>
人との関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 友達とトラブルになりやすい</li> <li>・ すぐに手が出る</li> <li>・ 言葉でのやりとりが苦手</li> <li>・ 園で言葉を発しない</li> <li>・ 友達からの指摘などに過敏に反応する</li> <li>・ 友達の嫌がることをわざとしてしまう など</li> </ul>

このような具体的な姿を示すことにより、保育者に「私の担当する子どもにも同じ姿がある」と思ってもらうことができ、エピソード集の活用につながるが、一方で、その姿が「子どもの困りか、保育者の困りか」を考えることが重要となる。読み手にもその部分が伝わるようにすることを共通理解した上で、エピソード集の作成を進めることとした。

上記の観点等を踏まえ、各園の担当者にエピソードの様式を提示した。作成のポイントとして、「なぜ子どもがこのような姿なのかについての読み取り」をエピソードに盛り込み、保育者に伝えることが重要であることを提示した。この部分が捉えられず、「手だてを見いだせない」、「手だてが正しいのか自信がない」など、不安を感じている保育者が多いのではないかと考えたからである。

また、エピソードは「子どもの姿」から考えるが、子どもの困りの解決にとどまらず、「遊びが充実する、その子のよさが発揮できる」という幼児教育の本来的な意義を、具体的な実践内容として含むようにすることを示した。

各園、3から6事例程度作成することとし、集まったエピソードについては、研究実践園の教員と幼児教育センターの指導主事とで意見交流をし、お互いの考えを生かしながらまとめていくこととした。

### ③エピソードの集約

エピソードは 30 事例集まり、エピソードの内容は表 I - 2 のように整理できた。エピソードの一部を図 I - 3 及び図 I - 4 に示した。

表 I - 2 市立幼稚園から集まったエピソード（計 30 事例）

カテゴリー	行動	集団	遊び	生活習慣	人との関わり
事例数	4	8	6	4	8

幼児期は支援の必要な幼児を含め同じ環境で園生活を送っており、支援の必要な幼児には担任の他に担当者が付き、集団の中で個別の支援をするケースが多いことから、集団の中でのエピソードが多く作成されたと考えられる。また、幼児は保育者の援助を受けながら、友達と関わる中で、お互いの思いを感じたり言葉のやりとりをしたり

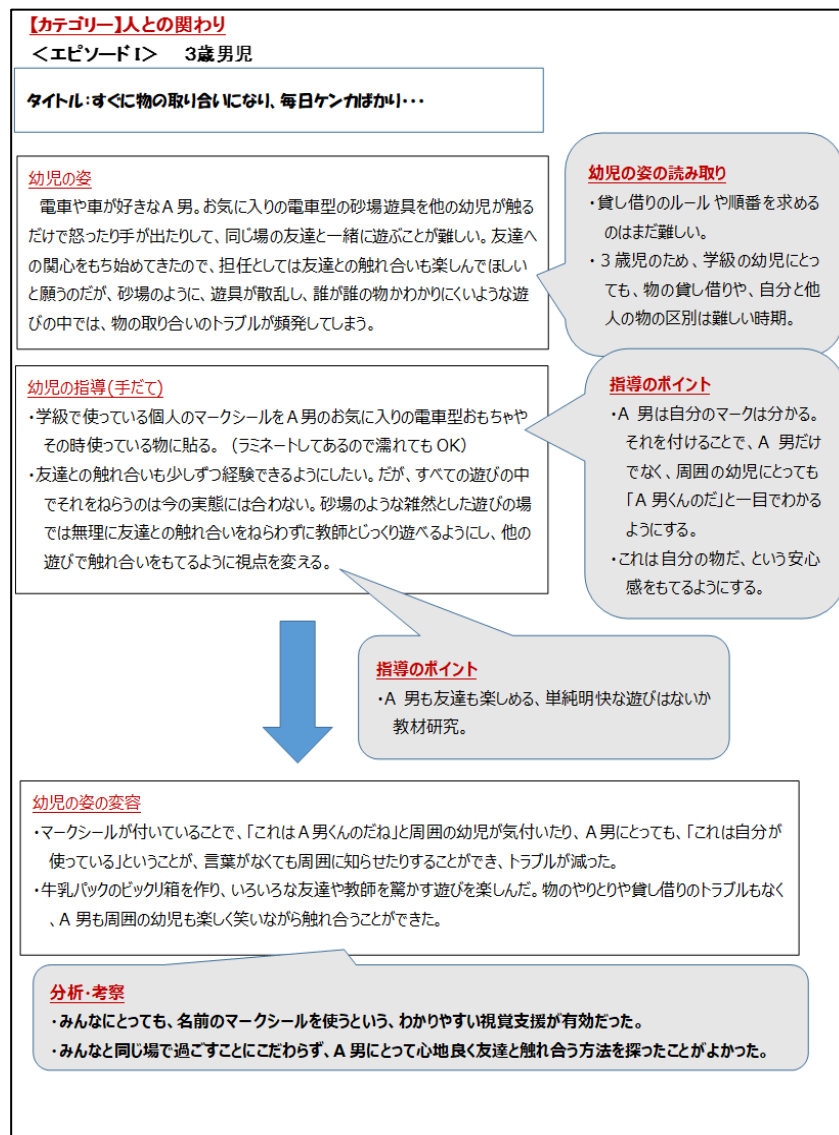


図 I - 3 収集されたエピソードの一部（3歳児の例）

して、望ましい関わり方を身に付けていく発達の段階であり、遊びの中でもその部分を大切にしていることから、人との関わりについて多くのエピソードが作成されたと考えられる。

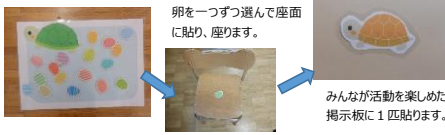

<p><b>【カテゴリー】 集団</b>  <b>&lt;エピソードD&gt; 5歳男児</b></p> <p><b>タイトル: したいことが優先で、立ち歩くAくん。</b></p>	
<p><b>幼児の姿</b>          学級の集まりより、自分のしたいことが優先のAくん。とはいえ、学級活動をみんなが先に始めると怒り出し、近くにいる教師や担任が使っている物などに八つ当たりして、進行を妨害してしまうことがあった。          「カメ」が大好きで、製作も折り紙も、カメに関することになると強い思いをもって取り組む。</p>	<p><b>幼児の姿の読み取り</b>          ・本当は、担任に注目されたい、受け止めてもらいたい気持ちが強いが、次にすることに見通しがもてずに、着席に間に合わないかもしれない。間に合って座ることさえできれば、一緒に楽しむことができるかもしれない。</p>
<p><b>幼児の指導(手だて)</b>          着席の際に、座面に貼ることができる『カメの卵』を用意した。座って卵を温めると、カメが生まれて、毎日掲示板に1匹ずつ増えていく。掲示板のカメが、学級の人数分溜まったら、「1匹ずつ、家に持ち帰ろうね」と、一定の期間、学級みんなんで取り組めるようにした。</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;">  <div style="margin-left: 10px;"> <p>卵を一つずつ選んで座面に貼り、座ります。</p> <p>みんなが活動を楽しめたら掲示板に1匹貼ります。</p> </div> </div> <p>Aくんが着席したら、みんなが楽しめるゲームなどの『お楽しみ』の時間をもつようにし、座っていたら楽しいことができたという経験を重ねられるようにした。</p>	<p><b>指導のポイント</b>          ・離席しそうになったら、「Aくん、座って。」と指示する代わりに、「あ、卵が！」と言うことで、自分で気付けるように。          ・温める時間を長くすぎないこと。          ・学級みんなにとっても嬉しい仕組みとなること。</p>
	
<p><b>幼児の姿の変容</b>          1ヶ月くらい続けたところで、人数分のカメが揃い、最後に本物のカメが登場し学級で育てることになった。その頃にはAくんは「お楽しみが始まるよ。」と声を掛けるだけで、着席できるようになった。他の幼児から「私、卵がなくても、座っていられるよ。」との発言もあり、「カメの卵」の利用をやめ、「お楽しみだよ。」と言葉掛けをし、着席を待つようにした。          その後Aくんは、学級の集まりに遅れそうになると、「待って！」と言うほど、遅れることを嫌がり、集まることに期待を持てるようになった。話合いなど、これまで興味を持てずにいた活動にも、積極的に発言するなど、自分なりに参加する様子が見られる。</p>	<p><b>分析・考察</b>          大好きな『カメ』を支援のツールにしたことは、学級に目を向けるきっかけとなった。着席してからの活動への参加の様子を見ると、教師に受け止めてもらいたい、注目してもらいたい、という気持ちや、自分なりに考える力や、几帳面に物事に取り組むなどの良さも見えてきた。『好きなモノやコト』を生かすことが気持ちの安定につながったのではないかと。</p>

図 I - 4 収集されたエピソードの一部（5歳児の例）

#### ④エピソード整理表（一部抜粋）

エピソードをまとめ、編集していく際の手がかりとして、表 I - 5 のように「エピソード整理表」を作成した。項目に「困りの具体」、「困りの見取り」とあるが「困り」について、「子どもも保育者も困っていること」と「子どもは困っていないが、保育者が困っていること」を混同しないようにエピソードを見直し、まとめていくことが重要であることを再確認した。

表 I—5 エピソード整理表

エピソード整理表					
年齢	タイトル	カテゴリー	困りの具体	困りの見取り	指導のポイント
4	スターポイントで、片付け頑張れるよ！	集団	片付けをしないでふざけてしまう	気分のムラ、目的を持たずに落ち着かない	頑張った自分を評価できる物を提示（スターポイントカード）
5	したいことが優先で、立ち歩くAくん	集団	離席して活動に遅れ怒ってしまう	自分の思い優先、気持ちの持続が難しい、見通しをもちにくい	気持ちを持続できる支援、達成感を実感
5	「学級活動の参加を拒むA男」	集団	初めてのことや運動に抵抗感がある	活動への不安、自己肯定感が低い	得意な活動を集団の中で認める
3	『こわい』からやらない！Aさん	集団	活動内容が分からず取り組めない	理解の難しさ、うまくできないことへの不安	内容をイメージできる場の保障、教師と一緒にという安心感
5	リレーって、いつ走り出したらいいのかな？バトンは誰に渡すの？	遊び	細かいルールの理解が難しい	回りの刺激に反応してしまう	視覚情報の整理、短い言葉
5	だって、負けたくないもん！	遊び	負けることを受け入れられない	負けるのがイヤ	見通し、経験
5	体を動かすことが苦手で、なんでもできない！から始まる子	遊び	運動的な遊びに取り組めない	協応運動・微細運動が苦手	ボディイメージをもてる支援、これならできそう！やったらできた！が自信に
5	「つくってくれてありがとう」	人との関わり	友達との関わりが広がらない	一人で遊ぶことが多い	本人が好きな活動の中で他児とやりとり
3	すぐに物の取り合いになり、毎日ケンカばかり・・・	人との関わり	友達との関わりで手が出るなどトラブルになる	自分の物と友達のもの区別が難しい	自分の物が明確にわかる支援、簡単な遊び
3	所持品の始末が定着しづらいA男君	生活習慣	所持品の始末が定着しない	方法や指示の理解が難しい	視覚支援、短い言葉、次の活動の見通し
4	一番になりたい！	行動	一番にこだわる	自己肯定感が低い	自分のよい行動を実感（やったねカード）

## （２）幼児教育施設の教職員のニーズに合った発信内容の研究

### ①集約したエピソードを踏まえて研究実践園教員と意見交流

保育の中で大事にしたいことや保育者の援助のポイント等、自分たちが伝えたいことを示すことができる方法について交流した。

#### （ア）エピソードの内容について

- ・ どのエピソードも園の実践で探ってきた支援を分かりやすく記載している。
- ・ 保育者から「人との距離が近い」、「人前で話せない」、「体が弱い」というお子さんについて聞かれることが多く、エピソードに加えるとよいのではないかな。
- ・ 保護者や関係機関との連携などのエピソードがあるとよいのではないかな。
- ・ 遊び自体を楽しくする工夫や、面白いからまたやりたいと子どもが思えるようにするためのポイントが、もう少し加わるとよいのではないかな。
- ・ 手だての具体がズバッと伝わる表現で書いたり、下線や太字で強調したりするとより効果的に伝わるのではないかな。

#### （イ）集約の方法について

- ・ 編集する際にカテゴリー分けが必要だろうか。タイトルでどのようなエピソードかが分かるようにしてはどうか。
- ・ 幼児教育施設の一日の生活の流れに沿って掲載するとよいのではないかな。
- ・ フローチャートで目次を作ると自分のケースに当てはめて探しやすいのではないかな。

## ②意見を受けての考察

意見交流を受け、図 I - 6 のように、エピソードの様式に反映させた。

各園から集約したものは個々の幼児についてのエピソードのため、一人の幼児への関わりが学級全体の学びになったという「学級としての学び」と、読み手が捉えやすく自分の保育の見直しにつながる「エピソードのポイント」について（ピンクの吹き出し部分）、編集を進める際に考察として加えることとした。

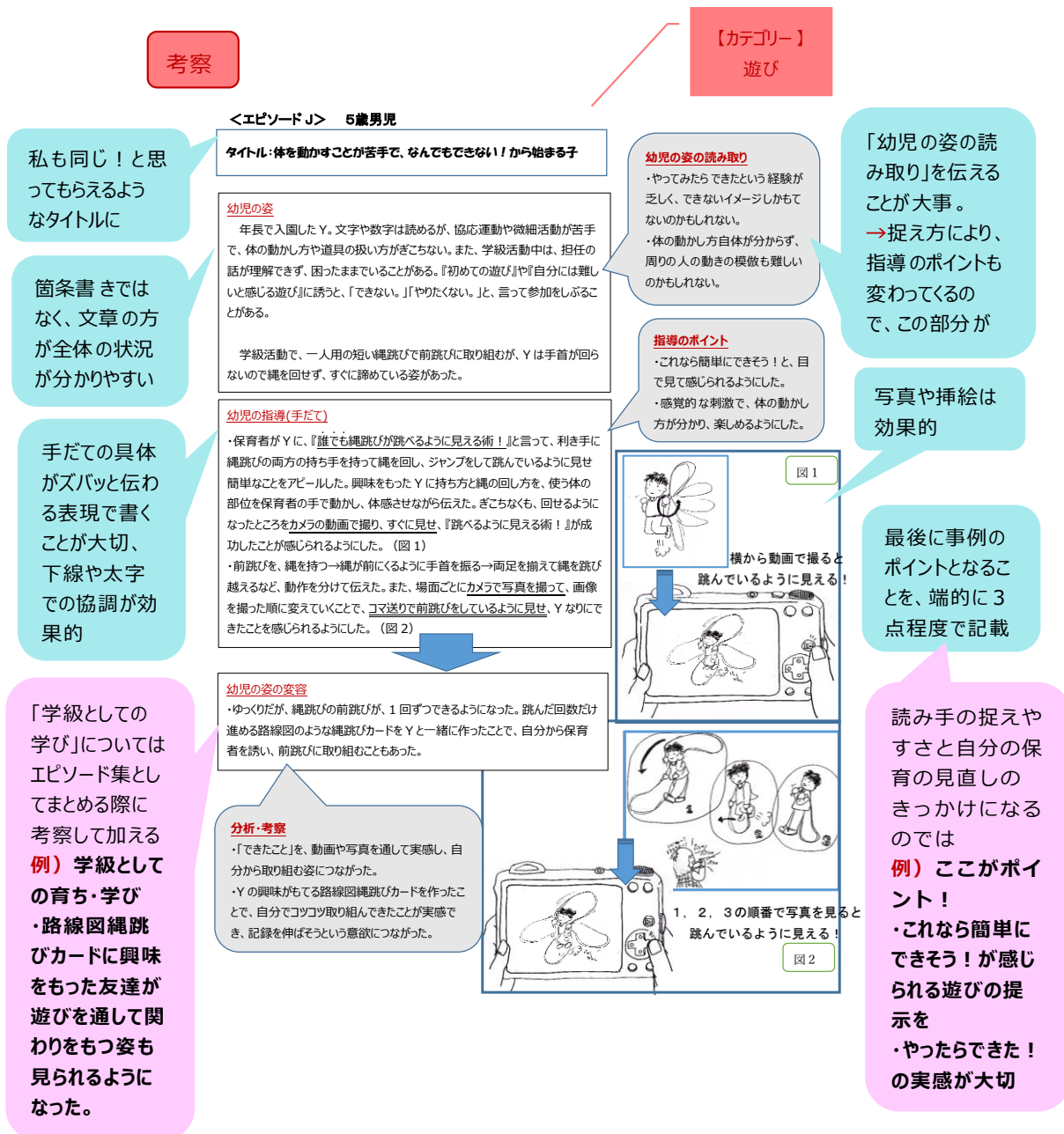


図 I - 6 エピソードのポイント



### 3 考察

本研究は、保育者へのインクルーシブ教育システムの理解啓発を図ることを目的として、研究実践園の実践を基にしたエピソードの集約及びその効果的な発信について検討を進めてきた。ここでは、これまでの二つの取組方法を踏まえ、考察する。

#### (1) 研究実践園における幼児の実態に応じた具体的な手だて（エピソード）の集約について

各園から集約したエピソードは、保育の実践を基に作成しているため、多様で具体的な内容であった。また、幼児の気持ちに寄り添い、受け入れるという教員の関わりは幼児の安心や「大丈夫」という気持ちにつながっていることも読み取ることができた。幼児期にふさわしい教育を行う際にまず必要なことは、一人一人の幼児に対する理解を深めることである。また、幼児が何に興味をもっているのか、何を感じているのか、そのような行動をとる理由は何かについて、保育者が幼児と触れ合い、その思いや気持ちを丁寧に感じ取る姿勢をもつことが重要である。幼児は自分の心の動きを言葉で伝えるとは限らないため、表面に現れた行動や言葉から、幼児の内面を理解することは、幼児の心を育てることを重視する幼児教育にとって欠くことのできないものである。捉え方により指導のポイントも変わってくるため、「幼児の姿の読み取り」は、特に重要であり、エピソードを通して具体的に発信したいと考えている。

エピソードのタイトルは、「～ができない」という否定的な姿ではなく、「～したら参加することができた」「こうやったらうまくいった」という肯定的な姿や様子にすることで、保育者の幼児の姿の読み取りも肯定的になるのではないかと考える。

また、エピソードを整理する手掛かりとして「子どもの姿」を挙げたが、その姿の背景には、子どもが困っている「理由」があり、その結果としてこのような行動・状態に表れているのではないかと、さらに、子ども自体は困っておらず、保育者が「扱いにくい」と感じているだけではないかと、などについて考察し、まとめていきたい。

#### (2) 幼児教育施設の教職員のニーズに合った発信内容の研究について

今回は、「個」としてエピソードを集約したため、インクルーシブ教育システムの理解啓発に向けて、「学級としての学び・育ち」について考察し、エピソードに加えていくことが今後の取組として重要であると考えます。

保育者と直接関わっている幼児教育支援員から保育者のニーズに関わる情報を集め、学級担任の教員と意見交流をしながらエピソードのまとめ方等について検討している。さらに、研究実践園同士の横のつながりを生かすことで、広い視点の意見交流ができていると考える。読み手にとって分かりやすい内容を考えることにより、発信方法が精査されるとともに、今後の市立幼稚園の実践研究の発信全般についても大変参考になると考える。引き続きニーズを探り、エピソードの内容や発信の仕方について検討

していきたい。

作成したエピソード集については、配布して終わりではなく、幼児教育施設を訪問する幼児教育支援員等がアドバイスする際の資料として活用するようにしていきたい。活用する際は、資料を基にポイントを絞って説明するなどして、保育者により実感をもってもらえるようにし、自信をもって保育に当たってもらえるようにしていきたいと考える。

#### 4 今後に向けて

令和2年度は、この後も「学級としての学び・育ち」及び「エピソードのポイント」について考察、追記し、エピソードのまとめ方について検討し編集を進める。

また、令和3年度には、挿絵や環境、教材等の写真の挿入等について検討し、全体の編集作業等を進めていく予定である。

支援を必要とする幼児との関わり方などについての書籍は様々発行されているが、今回私たちが取り組んでいるエピソード集は、保育現場で日々、子どもたちと向き合ってきた市立幼稚園の教員の実践が基になっており、読み手である保育者には、地域の身近な実践として受け止めてもらえればと考えている。今後もエピソードを追加するなど、保育者のニーズに応じて更新していきたい。

札幌市では、幼児期にふさわしい生活の中で、子どものしてみたいことが叶い、その子らしさが発揮され、子どもが主体的に生活することができる幼児教育を目指しており、このことを全ての幼児教育施設につなげ、ひろげていきたいという思いをもって、幼児教育の振興を図っている。

幼児教育施設は、施設形態が多様であるとともに、私立幼稚園等はそれぞれの建学の精神に基づいて教育を行っており、活動内容等が市立幼稚園のエピソードとマッチしないことも予想されるが、どのような教育内容であっても子どもの捉え方や関わりポイントについては変わるものではないと考える。

今回の研究で作成しているエピソード集においては、支援を必要とする幼児との関わり方の単なるノウハウだけではなく、幼児の内面の読み取りを大切にすることや困っているのが子どもか保育者かを振り返ることで、幼児の見方や捉え方が変わることを示していきたいと考えている。このような視点の変化が、支援の変化につながるのではないかと考え、こうした考え方を幼児教育施設と徐々に共有していけるようお願い、札幌市が目指す幼児教育に向かって今後も研究を進めていきたい。

#### <文献>

- ・札幌市教育委員会（2018）．「札幌市幼稚園教育課程編成の手引」
- ・文部科学省（2019）．「幼児理解に基づいた評価」